



2017年4月、紀尾井ホール室内管弦楽団首席指揮者に就任したライナー・ホーネック。インタビューや密着取材を通してその人となりに迫ります。



ウィーン・フィル 楽員生活は末席から

取材・文 岡本和子

今では誰もが知るウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の「顔」として活躍するホーネックだが、最初からコンサートマスター（以下「コンマス」と表記します）だったわけではない。「1年間の試用期間を経て1981年にトゥッティ奏者として入団した後、しばらくいちばん後ろの席で弾いていました。翌年、再度オーディションを受けて2年間次席奏者を務めて、83年にまたオーディションを経てコンマスに就任しました」

ウイーン・フィルハーモニー協会の規約には、国立歌劇場管弦楽団のオーディションに合格し、1年間の試用期間を経て正団員となり、最低3年間歌劇場の団員として力を実証して初めて正団員になることができると記されている。国立歌劇場管弦楽団の団員は公務員であり、自主運営のウイーン・フィル（協会）はいわば

「公務員の課外活動」。現在はすべての奏者が入会するが、かつては歌劇場の楽員だけにとどまるものいたらしく。「実は私が83年に就任したのは、国立歌劇場管弦楽団のコンマスで、ウイーン・フィルではありません。現在は歌劇場もウイーン・フィルも、同じ4人のコンマス体制ですが、あの頃は5人いて、5番目のコンマスは歌劇場のバレエ公演だけを担当して他の公演では次席で弾いていました。このポジションは94年ごろに廃止されました。64年にカラヤンがウイーン国立歌劇場の音楽監督に就任したとき、オーケストラの人員を大幅に増やしたようで、そのときに第5コンマスのポストが増設されたようです。当時はヴェルディやブッチーーといった『重量級』の作品が連日取り上げられて、最前列に「コンマスが2人いることを要求する指揮者も多かった。だから5人のコンマスが必要だったのです」

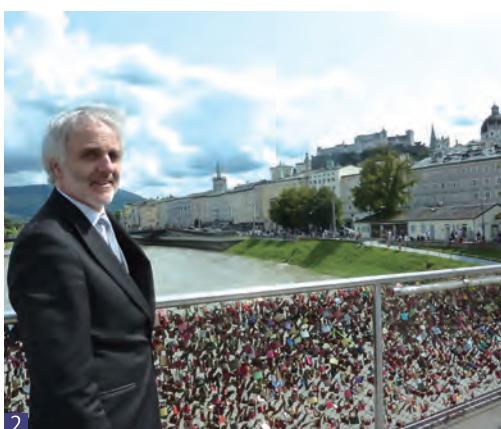
一言で「コンマス」といつてもいろいろなタイプがある。最初からコンマスとして入団して最前列で弾く奏者もいるが自分は違うという。「私は最後列から徐々に前の席に進んでいくほうが性分に合っています。だから第5コンマスと一緒に、試行錯誤しながら全体をリード

していく「ツ」を徐々に体得できたのはありがたいことでした」

連日異なる演目が上演されるウイーン国立歌劇場では、通常、レパートリー公演のリハーサルは行われない。すべてがぶつけ本番だ。そのため、オペラ経験の少ない新人奏者はまず二通りの演目を経験することが必須となる。オペラは長いので、本番中の小さな事故は日常茶飯事。最初は「とにかく最後まで弾ききることで精一杯」のようだ。



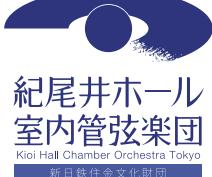
「初めて弾いたオペラは『椿姫』だったからまだ何とか最後まで弾けましたが、その次に弾いた『トスカ』は……酷かった（笑）。始まつたら音楽がどんどん先に進んでしまい、脳内が真っ白になつて撃沈（笑）。オペラは大変です。だから最初の頃は末席で自立たないように大人しくして、誤が分からなくなると、弾いているふりをしてその場をしないでいました（笑）」



① キュッヒル、ホーネック、シトイデ、ダナイローヴァの4人体制だった2015年9月のコンマス・ローテーション表（ウイーン国立歌劇場、コンサートマスター控え室にて）
② ウィーン・フィルは81年に入団してから、夏は毎年ザルツブルク「初めての音楽祭で、巨匠カール・ベームの最後の指揮で演奏しました」（写真は今夏のザルツブルク音楽祭にて）
※トゥッティ奏者…肩書きをもたない一般団員。

5回の定期演奏会を、同一曜日・同一座席・お得な料金で! 紀尾井ホール室内管弦楽団 2018年度

定期会員 11/18(土)新規募集開始



2018年度定期演奏会は、クープラン、バッハから、ウォーン=ウィリアムズや武満まで、色彩豊かな響きが美しい作品の数々を取り上げます。首席指揮者のライナー・ホーネックはじめ、パオロ・カリニャーニ、アレクセイ・ヴォロディン、今井信子、マリオ・ブルネロらの優れたアーティストたちとともに、極上の室内オーケストラの響きを心ゆくまでお楽しみください。

あなただけの特等席

全公演とも同一の曜日に同一のお座席でご鑑賞いただけます。

おトクな会員割引価格

1公演券を購入する場合に比べ、どの券種でも約2割引になります。

定期会員限定イベント

楽団メンバーとの交歓会や、リハーサル見学にご参加いただけます。

演奏会の詳しい内容は、パンフレット、紀尾井だより125号、または紀尾井ホールホームページをご覧ください。